

アメリカの公立小学校における日本語イマージョン教育の事例 -授業観察と教師へのインタビューからの気づき-

河村 明里 (南山大学)

1. はじめに

本活動のテーマは「イマージョン教育」です。筆者はアメリカへの留学中にバイリンガル教育の一種であるイマージョン教育についての授業を受講し、関心を抱きました。その後、実際の現場を見たいと思い、アメリカにおけるスペイン語、中国語、ロシア語イマージョンプログラムや、日本での英語イマージョンプログラムを訪問しました。さらに、アメリカでの日本語イマージョンプログラムでインターンシップを経験しました。これらの経験を通じて、特に教室内での言語使用と日本語イマージョンプログラムの持続と発展のために必要なサポートに関心をもち、詳しく調査したいとの思いから本活動に至りました。本報告書では、活動における学びの中から教室内での言語使用に焦点を当てて紹介します。

2. イマージョンプログラムの概要

2-1 イマージョンプログラムの歴史的背景

最初のイマージョンプログラムは、1965年にカナダのモントリオール郊外のセント・ランバート小学校で実施された実験的なフランス語イマージョン・クラスでした(Lambert & Tucker, 1972)。Genesee は、フランス語イマージョン・プログラムを開始した主な理由として、当時の教育制度では、子どもたちが不自由なく生活するために必要なフランス語能力を身につけることができないのではないかと英語を母語とする子供を持つ親たちが懸念していたことを挙げています。このプログラムは「学校でフランス語に触れる時間を最大限に生かすには、毎日短時間だけフランス語を教科として教えるのではなく、学校で習う通常の教科をフランス語で教えるしかない」という考えに基づいています (Genesee, 1987)。

Cohenによれば、アメリカ初のイマージョンプログラムは1971年に始まり((Cohen, 1974)、公

立小学校における日本語イマージョンプログラムは1998年にオレゴン州友人学園で始まりました。国際交流基金のウェブサイトでは、現在アメリカ国内に小学校・中学校・高校・日本語学校を合わせたイマージョンプログラムを提供している学校は43校確認できます(国際交流基金, n.d.)。

2-2 イマージョンプログラムの種類

イマージョンプログラムは多様性があるため、着目点によって、いくつかに分類できます。また、これらの分類や呼び名は地域によって異なることがあります。

Collier & Thomas は、学習者の母語に着目するとイマージョンプログラムは2つに分けられると説明しています。“Two-way immersion (双方向イマージョン)”はアメリカのスペイン語イマージョンでよく見られる方法です。この場合、クラスは英語母語話者とスペイン語母語話者で半分ずつ構成されます(Collier & Thomas, 2004)。一方で、“One-way immersion (一方向イマージョン)”の場合はクラス全員がL2学習者です。

Howard, Sugarman, & Christianによると、Two-way immersionの中でも授業での使用言語の割合の観点から、3つに分けられます。1つ目の“90/10 model”または“Minority language dominant”では、低学年のうちほとんどの授業(80~90%)を学習者の母語のうち少数派の言語で行い、徐々に多数派の言語使用を増やし、通常は4年生までに2つの言語使用がほぼ同等になるようにします。2つ目の“50/50 model”または“Balanced model”では、少数派の言語と多数派の言語の両方を同程度使用します。3つ目の“Differentiated”では母語話者と非母語話者とで、2つの言語の指導の割合が異なります(Howard, Sugarman, & Christian, 2003)。

イマージョン教育の開始年齢に注目すると、幼稚園または小学校低学年から始まる場合は

“Early immersion(早期イマージョン),” 小学校高学年から始まる場合は “Middle immersion/Delayed immersion(中期イマージョン),” 中学校から始める場合は “Late immersion(後期イマージョン)” に分類されます。

3. 日本語イマージョンプログラムの事例

3-1 ご協力いただいた小学校の概要

本プロジェクトにご協力いただいた小学校では1980年代後半に日本語イマージョンプログラムが開始されました。児童は理科・社会・日本語を日本語で学ぶイマージョンクラスと、全科目を英語で学ぶ一般的なプログラムを実施するネイバーフッドクラスのいずれかを選択します。イマージョンクラスのほとんどの児童は英語母語話者である One-way immersion で、幼稚園からプログラムを開始する Early immersion のプログラムです。幼稚園から6年生までのイマージョンクラスには約300人の児童が在籍しており、多くの児童は、同じ学区内にある日本語イマージョンプログラムのある中学校や高校に進学します。幼稚園から高校までの全児童生徒数は約500人です。同じ学区内では、ロシア語・スペイン語・ドイツ語・中国語・フランス語・先住民族の言語を含む7種類の言語イマージョンプログラムが実施されています。同校区では、これらのプログラムへの参加を希望するすべての児童に平等な機会を提供するため、無作為の抽選によって入学者を決定します。一度プログラムに参加した児童は、12年生まで同じプログラムを続ける権利が保証されます。

この小学校のイマージョンプログラムでは以下の5つを目標として掲げています(表1)。

表1 プログラムの目標

- ・高いレベルの日本語能力の習得
- ・年齢相応の英語能力の習得
- ・カリキュラムの各分野の目標に沿ったスキルと知識の習得
- ・日本語を話す他者やその文化に対する肯定的な態度を身につける

- ・教室で日本人インターンと共に学ぶことで、長期的な絆を築く。

3-2 調査方法

本活動では、プログラムに関する深い理解を得るため、2日間にわたり授業観察と教師への事後インタビューを行いました。授業観察対象となったのは、全学年の日本語で学ぶ科目の授業です。観察は、教室の後方でメモを取りながら実施しました。インタビューでは4名の教師の協力を得て、それぞれに40~60分の半構造化インタビューを行いました。インタビューは教師の母語である英語または日本語で実施されました。教師の同意を得て、インタビューはICレコーダーに録音され、音声を文字起こししたデータと授業観察のメモを基に、分析および考察を行いました。



図1 授業風景

3-3 「日本語だけ」ルールの実態

イマージョンプログラムの児童は各学年20名前後の2つのグループに分けられ、半日を英語(ほとんどの児童にとってはL1)の教室で、残りは日本語(L2)の教室で過ごします。昼食と昼休みの前後の時間で教室を入れ替え、午前中使用しなかった英語または日本語に切り替えます。この小学校では、ほとんどの児童にとってL1である英語の使用は完全に禁止という明確なルールがあったため、この共通の理解に基づき、観察中英語を話す児童は一人も見られませんでした。教室内には「英語で話しません。日本語だけです。」「英語はダメ!日本語だけ!」などの掲示物が見

られました。さらに、英語を話してしまった人にはクラス内におけるポイント減点またはネガティブポイント加算のような、英語を話してしまった時のペナルティがクラスごとに用意されており、「日本語だけ」ルールが全学年で一貫して徹底されていました。

3-4 「日本語だけ」ルールの課題

英語使用禁止が徹底されている一方で、インタビューでは複数人の教師が児童のL1である英語を使用した方が状況によっては効果的だと感じていることがわかりました。そこで筆者は「日本語だけ」ルールにおける課題として4つに分類しました。

1つ目の課題は、特に高学年の児童の場合、いくつかの単語を英語で与えた方が、理解が早く正確になり、より深い内容に進むことができるという点です。ある教師は、英語で単語を与えることで児童が早く理解できる例として「憲法」を挙げました。実際、その教師が授業中に英単語を口にすることはありませんでしたが、社会のワークシートの単語リストには、「民主的：人々がルールをつくること(democratic)」のように日本語での説明の横に英単語が書かれていました。同じように、他の教師の理科の授業のスライドには「道管」「師管」などの用語の横に英語も書かれていました。理科は中学校から英語で学ぶ科目になるため、用語を英語で伝えておく必要があるとその教師は考えています。

2つ目の課題は、カタカナ語の過剰な使用です。ある教師は、カタカナ語の使用バランスが難しいと述べていました。教師がいくつかの単語をカタカナで伝えると、英単語をワークシートやスライドに記載するのと同様に、児童の理解が早くなります。例えば、理科の、教師が根の働きの一つを「体が倒れないようにホールドする」と説明しました。他にも、「豆電球を1個取ると、回路がブレイクします。」「電気がリリースされないと熱い」などの説明もありました。この時の発音は英語に近づけずに、カタカナで発音していました。カタカナ語は口頭だけでなく、ワークシートや掲示物

にも同様に使用されていました。

3つ目の課題は、親からのサポートを得ることが難しい点です。全国で統一されたカリキュラムが存在しないアメリカでのイマージョン教育の特性上、教師は各学区のカリキュラムに鑑みながら児童の日本語能力なども考慮した上で何をどこまで教えるのか決定します。そのため、多くの親が日本語が読めない環境で、親が学習内容を把握して自宅で子どもをサポートすることは容易ではありません。

4つ目の課題は、将来アメリカでの生活を続ける子どもたちが、英語で用語を学ばないことによる懸念です。例えば、日本語イマージョンプログラムのない他の学区に転居することになった場合や、実際に毎年約1~3人の児童が様々な理由でプログラムを離脱していることを考えると、将来学業面で不利になってしまう可能性があるとの考えがインタビューを通してわかりました。

3-5 「日本語だけ」ルール維持の重要性

一方で、「日本語だけ」ルールを遵守・維持することの重要性も指摘されました。ある教師は、教師が英語(L1)を使って説明するようになると、児童は教師が英語で説明し始めるまで待ってしまい、日本語で説明しているときに集中して理解しようとせずに英語を使うときだけに注意を払うようになることを懸念しています。さらに、他の教師もこの意見に賛成しており、新しい単語と共に英語訳を与えると、文章を読んだり、教師の話の聞いたりする中で、わからない日本語に出会ったとき、児童は文脈を読もうと思わなくなってしまうと考えています。また、単語の正しい意味を確認したり、内容を正しく理解するために英語を使用したりすることに慣れてしまうと、児童が「間違えてはいけない」「完全に理解しないと先に進めない」と考えるようになる可能性があるとの指摘もありました。さらに別の教師からは、日本語能力だけに焦点を当てるのではなく、幼い頃から日本語だけの環境という難しいことに挑戦するマインドセットを学んでほしいという思いも語られました。

3-6 「日本語だけ」ルールのデメリットを補うための工夫

3-4で挙げた日本語禁止ルールの課題を克服するために、ご協力いただいた小学校では英単語やカタカナ語の効果的な使用以外にも様々な取り組みが行われています。例えば、英語で語彙を学ばない懸念に対しては、ある教師は宿題として BrainPOP⁽¹⁾をはじめとした学習サイトの動画を英語で視聴させることで、日本語で学習している内容を英語を使って家で学習するサイクルを作っていました(表2)。

表2 1週間の宿題の例(曜日は提出日)

<p>【月曜日】 日記(日本語) ・10行以上書く ・5つ以上形容詞を使う ・5つ以上動詞を使う</p>
<p>【火曜日】 パッセージリーディング(理科・社会) ・わからないことばは意味を調べてくる</p>
<p>【水曜日】 リーディングコンプリヘンション (理科・社会)</p>
<p>【木曜日】 BrainPOPで英語で動画を観る (理科・社会) ・ワークシートに日本語で書かれた質問に日本語で回答する</p>
<p>【金曜日、週末】 宿題なし</p>

また、日本からの学生・社会人のインターン生や日本語母語話者である保護者のボランティアを受け入れることにより、教室内で児童がサポートを受けやすい体制を作っています。さらに、高学年生に対しては、課題を終えていない児童や、自主的に取り組みたい児童に対し、昼食時間や放課後に教室での勉強を促します。この時間は教師がサポートを行うため、親の助けを借りずに、学校内で疑問や問題を解決できる環境を整えています。

4. 筆者の考察—教室内方言の浸透—

中島(2016)は、カナダにおけるフレンチ・イマージョンの問題点として「間違いが訂正されず、教室内方言ができること」を指摘しました。実際に筆者が授業観察をした全ての教室で教室内方言が浸透していることが確認されました。以下は授業観察中に見られた児童によるエラーの例と、筆者が発言の意図を推測したものです(表3)。

表3 授業観察中に見られた児童によるエラー

<p>S「あなたのホームタウン、いちの日だけ雪がありますか？」 →(あなたの)出身地では1年に一度だけ雪が降りますか。</p>
<p>S「犬はお母さんを食べますと病院に行きます。」 →お母さんは犬に噛まれたので、病院に行きました。</p>
<p>S「私のエキスチェンジスチューデントが力もちとせがたかいからグリスリくまみたい。」 (作文) →私の家でホストしている交換留学生は力持ちで背が高いからグリスリーベアーみたいです。</p>
<p>S「あなたこれしました。と私これしました。」 (自分が何かをした理由を、相手がしたことに対して行なったとジェスチャーと共に説明)</p>
<p>S「じゃない！」 →ちがいます。</p>

これらのエラーに対して教師からその場での訂正フィードバックはありませんでした。これは、イマージョン教育の現場では言語ではなく学習内容に焦点を当てているためだと考えられます。筆者が教室内方言を単なる言語間エラー、ローカルエラーと区別しているのは、教師も教室内方言とも捉えられる言語を使用すること、また児童にフィードバックが与えられないという特徴的な

環境であることが理由です。3-4で言及したとおり、教師も「ブレイクします」「リリースされない」と熱いなど児童の理解を促すためにあえてカタカナ語を使用する場面が頻繁に見られました。これらはエラーではありませんが、程度によっては日本語母語話者にとって不自然に感じる可能性があります。使用言語が日本語のみに限定されている環境で、限られた文法・語彙を使い、英語を母語として共有している児童同士、または児童と教師における、学校生活や学習のために必要なコミュニケーションを優先した結果であると考えられます。さらに、この小学校の児童が通う学区内には日本語イマージョンプログラムを実施している小学校・中学校・高校はそれぞれ1校ずつであるため、プログラムに参加した同級生と幼稚園から高校卒業までの13年間共に過ごします。この閉鎖的な環境によってエラーが定着してしまい、日本語母語話者が話す日本語と、文法や語彙、ピッチが異なる教室内方言が生まれていることにさえ気づかないという懸念があります。また、母語を共有している教室内では努力せずとも互いに理解できることから言語として機能しているため、問題視されない傾向があるといえます。

一方で、クラス全員が日本語学習者である **One-way immersion** ではなく、クラスの半分が日本語母語話者、残りの半分が英語母語話者、という **Two-way immersion** の環境だと、教室内方言が緩和されるのではないかと推察できます。インターン生やボランティアを受け入れるのと同じように、母語話者にとって正しいとされる表現のインプットや訂正フィードバックの機会を増やすことができるためです。地域や学校の特徴により、日本語母語話者がクラスの半分以上を占める環境を作り出すのが困難である場合は、オンラインにおける協働的学習も効果的だと考えられます。オンライン上でも日本に住む日本語母語話者と交流することで、似た効果をもたらすことが推察されます。

5. 筆者の学びと今後の活動

本活動を通して、アメリカ公立小学校における日本語イマージョンプログラムでの言語使用の実態や、教師の考えを事例として深く知ることができました。

さらに、本活動では実際に現場に足を運んだことで、現地で児童や保護者、大学教員とも関わる機会を得ることができました。児童や保護者との関わりを通して、イマージョンプログラムの存在により、プログラムに在籍する児童や保護者はもちろん、ネイバーフッドクラスの児童や親戚、周辺地域の方々も放課後の活動やイベントを通して日本語や日本文化を身近に感じ、関心を持っていることがわかりました。今回は教師の視点で教室内での言語使用を中心に考察しましたが、今後教師以外の視点でも考察していきたいと考えています。また、現地の大学教員との交流によって、13年間イマージョンプログラムで学んだ卒業生のその後についても興味を持ちました。特に、プログラム卒業後、イマージョン出身の学生は長年正しいと認識してクラスメイトと使用してきた教室内方言を修正することができるのか、高校や大学で文法から学ぶイマージョン出身でない学生と比較した場合、日本語能力が逆転することはないのかなどの疑問が残りました。

本活動での調査の限界のひとつは、日本語だけの指導で理科や社会の学力に影響がないかを確かめるための学力テストのデータにアクセスできなかったことです。先行研究ではイマージョン教育によって学力の面で著しく劣っていることは確認されないとの結論が多く見られますが、実際に現場を見てみて、その結果は学習言語や学習環境などの要因によって大きく影響を受けるのではないかと考えるようになりました。例えば、「日本語と英語」はイマージョン教育が始まった「フランス語と英語」ほど近い言語ではなく、日本語の用語と英語の用語を結びつけて理解を助けることは難しいことが推察されます。さらに、漢字の学習が理科や社会などの教科学習の進度に追いつくことが困難であることから、多くの用語をひらがなで学ぶことで、漢字から意味を推測し、理解を助けることが難しくなるといった特徴

があります。いくつもの分類方法があり、多様性があるイマージョン教育だからこそ、教室内でL1使用を禁止するかどうかなども含めて、現場の教師がプログラムの特徴や児童の環境、特性など様々な観点を踏まえて決定する必要があることを本活動を通して実感しました。一方で、教師は通常の小学校教員としての業務に加えて、全ての教材の英語から日本語への翻訳や、日本語能力に合わせて作り変えた理科や社会のワークシートの準備など、既に多岐にわたる業務を抱えていることにも気づきました。今後は日本語イマージョンプログラムの継続や更なる発展のために、現場の外からできるサポートを模索していきたい

と考えています。例えば、海外に住む子どもの興味を惹く内容のオンライン学習プラットフォームを作成し、週末や長期休暇に親のサポートなしでも、そのウェブサイトアクセスさえすれば日本語に触れられる環境を作り出すことを考えています。また、日本で英語を学習する子どもとつなげるためのコミュニティを運営することで、授業外で日本語を使用する機会を提供し、幼稚園の頃親に勧められて入った受け身の学習者のための動機づけとなることを期待しています。

本活動を通して得ることができた学びを第一歩とし、今後大学院やその先の実践や研究活動につなげていきたいと思いをします。

注

(1) BrainPOP は幼稚園から8年生向けの教育サイト。理科・社会・英語・算数などを扱った短いアニメーション動画や確認テストが含まれている。公式サイトによれば、アメリカの学区の3分の2以上、年間2,500万人以上の児童生徒が利用している。<https://www.brainpop.com/> (2024年4月14日閲覧)

参考文献

- (1) 中島 和子 (2016) 『完全改訂版 バイリンガル教育の方法-2歳までに親と教師ができること』 アルク, Japanese Edition, pp.173-174.
- (2) Cohen, A. D. (1974). The Culver City Spanish immersion program: The first two years. *The Modern Language Journal*, 58(3), 95-103.
- (3) Collier, V. P., & Thomas, W. P. (2004). The astounding effectiveness of dual language education for all. *NABE Journal of Research and Practice*, 2(1), 1-20.
- (4) Genesee, F. (1987) *Learning through Two Languages: Studies of Immersion and Bilingual Education*. Newbury House Publishers, New York.
- (5) Howard, E. R., Sugarman, J., & Christian, D. (2003). Trends in Two-Way Immersion Education. A Review of the Research.
- (6) Japan Foundation Los Angeles. (no date). Immersion programs. (<https://www.jflalc.org/jle-parents-immersion>) (2024年1月20日閲覧).
- (7) Lambert, W.E. and Tucker, G.R. (1972). *Bilingual Education of Children: The St. Lambert Experiment*. Newberry House.